

「人が生きようとする意欲を支えること」

杉野万紀
管理栄養士

はじめて高橋卓志先生にお目にかかりましたのは、私が大学院在学中、赤坂でのゆきさんの「模擬ご葬儀」(笑)の時でした。

模擬ご葬儀&講義の時と同じように心に残る素晴らしいお話、ありがたく拝聴しました。

あたたかい真の優しさを感じる高橋先生にお会いできた時間をとてもうれしく、ご講義頂けたことに心より心より感謝申し上げます。

病院の待合で椅子に座っていて「これはかなわんなあ」と。そのお言葉は、医療現場に長年いる私にとって心に残るものでした。

確かに日本の病院は多くがそんな場所で、なかなか変えることが出来ない現実があります。スコットランドのマギーズセンターのような“死の恐怖の中でも生きる喜びと感じられる場所”“生きようとする意欲をサポートする“という場所が日本にも普通にどこの医療にもできたらいいのにと思います。

「がん患者さんの全体のケアのひとつとして、やさしく明るく風のしっかり通る場所がほしいなと思います」…私は医療のあり方を考えさせられました。

「3つの死へのデータ」と記され、お示し頂いたご自身のデータについて、「データをつけることがひとつのやすらぎになったり、よかったなと思いはじめました」とおっしゃられておられましたが、患者さん側からの生のデータがたくさん出てくると医療者側にとってもとてもいいと私も思います。

勤務している病院が、2020年ダイヤモンドプリンセス号から2人か3人目のコロナの患者さんを受け入れ、その後、要介護の全介助の80代男性を受け入れた際、医療者側である我々は、薬もないなか何をどうしていいかもわからないなか、このやせ細ったご高齢の方、治療といっても皆わからないけど。。。と不安な気持ちも持ちながら受け入れました。

夫婦二人暮らしのこの患者さんの奥様は、倒れそうな姿で病院を何度も訪れてこられ、「主人の好きなものです」と色々持ってこられていました。医師・看護師我々皆必至でした。一日数口しか食べ物が喉を通ってくれない日もありました。

医療現場のルールでは本当は違反だったけれど、医師と相談し違反を承知で家族の思いを通してあげたり必死で対応の日々。特効薬もないし食べなければ免疫も落ちるし、なんとしてでも！という思いで毎日毎日「〇〇さん！」と声かけた日々でした。奇跡的にコロナ陰性に回復し、ストレッチャーで奥様と共に自宅に退院の日、医療には決まったこたえがなくても、心と力を皆で合わせれば奇跡もあると経験し、ご本人と奥様に笑顔がもどった日であります。

当事者しか分からないことは多いものですが、人が生きようとする気持ちをどれだけどのようなかたちで支えることができるかを常に学び考え、少しでも医療のなかで役にたてる人になりたいと思います。